

報告番号	※ 号	第
------	--------	---

## 主 論 文 の 要 旨

論 文 題 目 『女人芸術』の人々と中国 —— 植民地的近代と女性作家の文化  
生産

氏 名 楊 佳嘉

## 論 文 内 容 の 要 旨

本学位申請論文は昭和初期（1927-1936）の女性文学における中国表象に関する文化的な研究を試みたものである。近代日本文学における中国表象についての先行研究では主に男性の作家や文化人が研究の対象とされている。個別の女性作家の中国表象についての研究もあるとはいえ、時期としては日中全面戦争以降、地域としては「満洲」に集中している偏向性がある。日中全面戦争が始まるまでの女性の作家や文化人たちと中国の関わりや、彼女たちの中国表象などについては、明確にされていないものが多い。

それに対して、本論文は雑誌『女人芸術』を拠点とした女性作家たちの中国表象テキストを取り上げ、彼女たちはいかに中国を語るか、〈中国〉は彼女たちの文化生産の過程においてどのような機能と意義を持ったのかについて論じる。本論文は二部からなる。本論に序章と終章を付しており、全体は 7 章によって論を展開している。

第一部では、マクロな視点で雑誌分析した上で、プロレタリア女性作家の作品をとりあげ、素材としての〈中国〉がどのように描かれたのかを分析し、その中国表象の彼女たちの文学創作における機能と意味付けを検討する。

第 1 章では、『女人芸術』における中国関連の記事の特徴をジャンルごとに整理した上で、『女人芸術』を拠点として中国に越境した日本の女性知識人たちの記録を分析することによって、彼女たちが描いた他者としての中国像を抽出し、彼女たちの中国へのまなざしをダイナミックに変化する中国像、植民地性の不可視化、

モデルとしての女性像という点から明らかにする。

第 2 章では、平林たい子の「満洲」を舞台とした小説である「投げすてよ！」と「施療室にて」を取り上げ、両作品における空間の意味と機能に注目し、作品における顕在化している植民地空間と潜在化している植民地空間の関係性を明らかにすることで、1920 年代の「満洲」体験の彼女にとっての意義を検討する。

第 3 章では、第 2 章の延長線上に、平林たい子の「満洲」関係のもう一つの作品である「敷設列車」を取り上げ、作品における中国人苦力の表象を分析することで、植民地帝国「満洲」における生政治の原理を明確にし、同時代のプロレタリア文化運動における、階級闘争を絶対的な価値と見なすイデオロギーを乗り越えようとした平林たい子の〈柔軟なインターナショナリズム〉の思想を究明する。

第 4 章では、中本たか子の「東モス第二工場」を分析対象として、インターナショナリズムの文脈において、無産階級の女性を啓蒙する教育小説としての、この作品で装置としての中国プロレタリアの革命運動がどのように機能したかを論じる。

第二部は、中国へ旅行した女性作家たちのトラベル・ライティング (Travel writing) についての研究である。ここでいうトラベル・ライティングとは、旅行をテーマとして書くことを意味する。取り扱うテキストには紀行だけではなく、旅行中の見聞についての評論や、旅行をテーマとした小説も含まれている。女性作家たちのテキストにおける他者への描き方と戦略を分析した上で、他者との交流が実現できた彼女たちにとって、中国旅行にはどのような意味があるか、中国表象が彼女たちの文化実践においてどのように機能しているかを考察する。

第 5 章では森三千代の「病薔薇」という小説を分析する。この小説は彼女自身の 1920 年代の上海旅行を素材にしてフィクション化したものである。作品における男性のまなざしとの女性主人公のその差異を比較しつつ、日本人の女性主人公と中国の女性作家の関係性を分析することで、当時の上海旅行は森三千代にとってどのような意味があったかを究明する。

第 6 章では林芙美子の 1930 年の中国旅行についての語りを中心に分析する。同時代の与謝野晶子や吉屋信子との比較を通して、林芙美子のはじめての中国旅行で、中国における多種にわたる植民地主義とどのように向き合ったのかを分析し、当時の中国が中下層の女性作家である林芙美子に与えた意義を明らかにする。

第 7 章では、有名作家になった林芙美子の、1936 年の中国旅行についての語りを分析する。日中関係の緊張が高まる時局の中での、林芙美子の「日中親善」の語りを分析することで、文化と政治についての彼女の中国に対する複雑な姿勢およびその根底にある文化侵略の思想を明らかにする。